

三島市周辺の石燈籠の石材と地震被害：
ジオツアー三島を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増島, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024593

三島市周辺の石燈籠の石材と地震被害 —ジオツアー三島を通して—

増 島 淳

静岡県東部地域では観光業再生の一助として、「伊豆半島世界ジオパーク構想」が進行している。筆者は2011年から「ジオ」に興味を持つ方々を対象に三島市と周辺地域で、徒歩による「ジオツアー三島」を企画・実施している。

ジオパークの構成要素は、地域の地形・地質のみならず、それらに関連する歴史遺産や各種産業などと幅広く、広視野で見ると地域のすべてがジオパークの構成要素となる。

石造物は地域の地質と人間のかかわりを知るジオパークの主要な構成要素である。石造物の人文科学的調査は各自治体で行われているが、自然科学的な調査は殆ど行われていない。今回は「ジオツアー三島」の下見で調べた三島市・長泉町・清水町内の石造物のうち、石燈籠だけに着目し、石材の種類の変化による違いや、石燈籠に残された地震の痕跡などをまとめる。

1. 調査した石燈籠の位置と数

伊豆地域の採石業は江戸時代初期、江戸城や駿府城の石垣用材の需要から始まり、都市部の発展に伴い本格化した。江戸時代後期からは古文書記録にも多出する。

調査地域内には江戸時代中期から現代にかけて設置された石燈籠が多数存在し、古いものは北伊豆の凝灰岩を用いたものが多く、新しいものは殆どが海外の石材を使用している。

観察・記載した石燈籠は、寺社境内や路傍の66か所、201基である。設置年代が確認できたのは、江戸時代78基、明治期18基、大正期13基、昭和期36基、平成期21基の合計166基である。設置年代の明らかな166基を対象として以下に考察する(図1)。

なお、個人宅の庭に設置されている石燈籠は調査対象から除外した。三島市立公園楽寿園内の多数の石燈籠も、小松宮殿下や李王家の別荘時に設置されたものなので除外した。これについては楽寿園のホームページに記載した。

2. 石燈籠の石材

石燈籠は上部より、宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎からなり(図2)、製造当初はどの部品も同一の石材を使用しているが、古いものは移動や破損によって異なる石材が部分的に補われ、一基で数種類の石材からなる場合があるので、「石燈籠の石材」とは「竿」の石材を意味することとする。石材の地学的名称は主に高橋豊の地質図によった。

(1) 時代による石材の変化

調査地域で最古の石燈籠は長泉町・願掛八幡神社境内の三島溶岩製燈籠で寛永19年(1642)であ

沼津高専非常勤講師

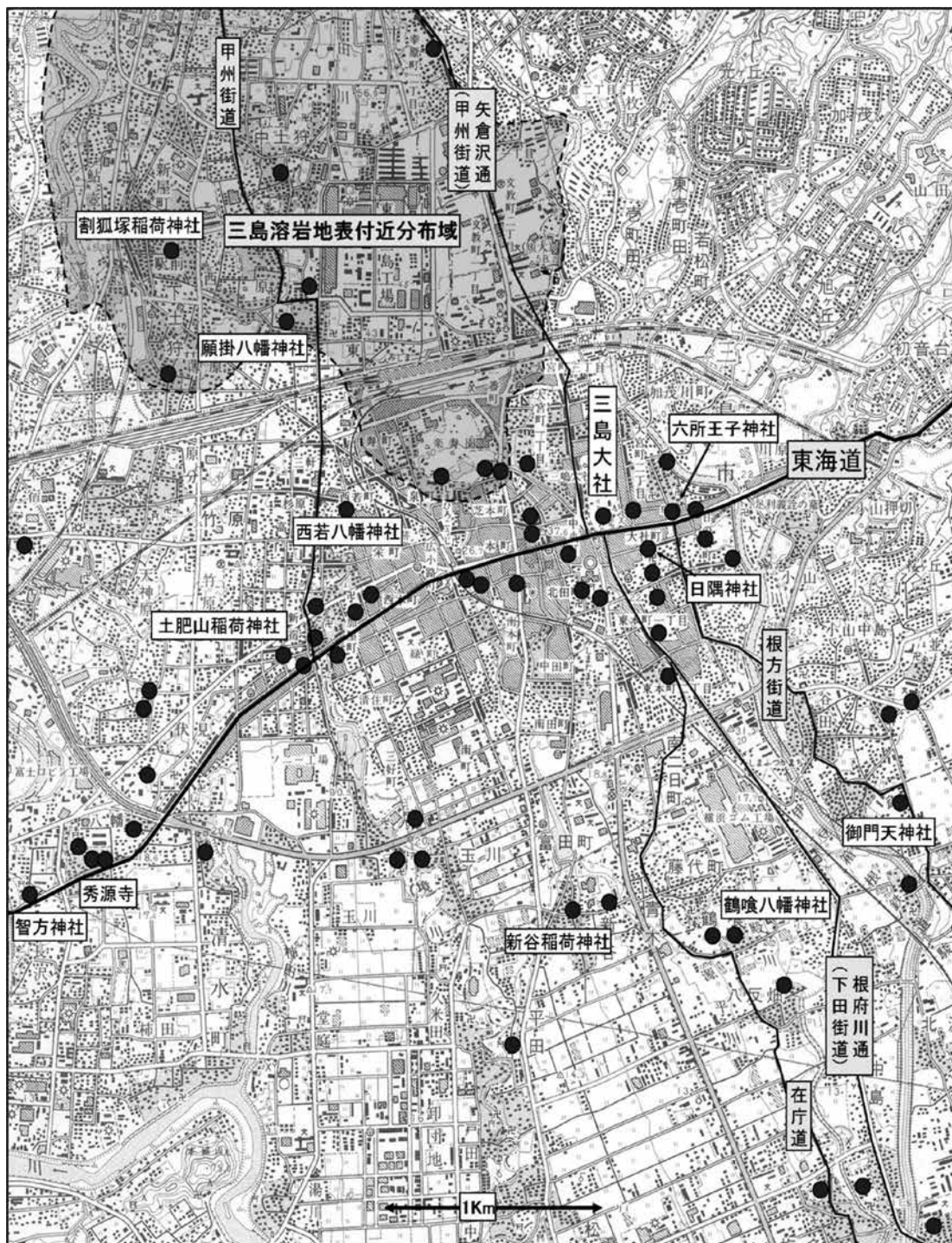


図1 調査した石燈籠の位置 1/2.5万 三島図幅

る。三島市内最古は西若町・若宮八幡神社境内の万治2年（1659）の火山岩類製（玄武岩～安山岩、石燈籠はハンマーで新鮮な断面を見ることができず、推定したものもある）である。

166基の石燈籠の設置年代と石材の関係を図3に示した。1758年までに設置された古い石燈籠11基中9基は硬い火成岩類である。風化に強く残りやすかったのだろう。

例外は、三島大社に小田原城主が宝永8年（1711・直前の宝永地震や宝永噴火で小田原藩は大被害を受けた。富士山の怒りを収める目的か）に奉納したもので、風化しやすい凝灰岩製（笠裏側の風化面は長岡凝灰岩中部層・伊豆の国市古奈付近の石切り場産・のように見える）だが、何度も修復を行った可能性があり、三島大社には安政地震（1854）で破損・修理した記録が残っている。メンテナンスが良ければ凝灰岩製でも後世まで残ることがある。

江戸時代後半（1762年以降）になると、現在の伊豆の国市・北江間・横根沢の石切り場で採石された凝灰岩「江間石＝長岡凝灰岩上部層、新生代・第三紀・鮮新世（数百万年前）に海底に堆積した火山灰が固結したもの。熱水の影響を若干受けて褐色を呈す、砂質凝灰岩」を石材とした燈籠が出現し、以後の設置年代のわかる凝灰岩製燈籠の殆ど全ては同材で作られている。

同材は、火山岩に比べると柔らかく加工しやすく、表面の色合いはよくないが、砂質なので、耐久性もあり実用的で、本地域の石燈籠の主流である。同材を使用した燈籠は昭和9年（1934、清水町・秀源寺）まで確認できた。

江戸時代を通じ、安山岩や玄武岩製の燈籠も数多く製造されているが、硬く手間がかかり工賃も上がるためか、主流ではない。

1876年～1900年は設置数が極端に少ない。明治維新後の不安定な社会情勢が影響したものと思われる。

太平洋戦争前後は石燈籠の設置は殆どなく、戦時中の経済活動の低下が推察される。



図2 石燈籠の部分名称

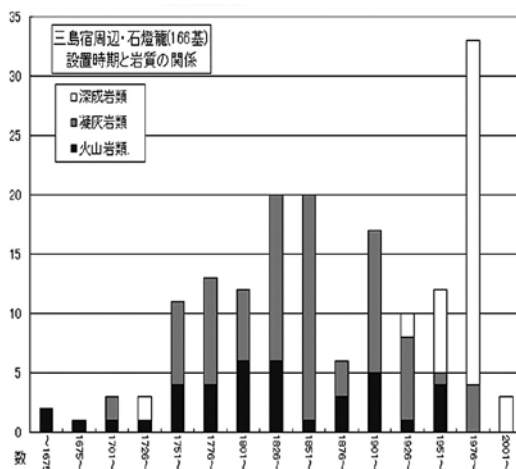


図3 石燈籠の設置時期と岩質の関係

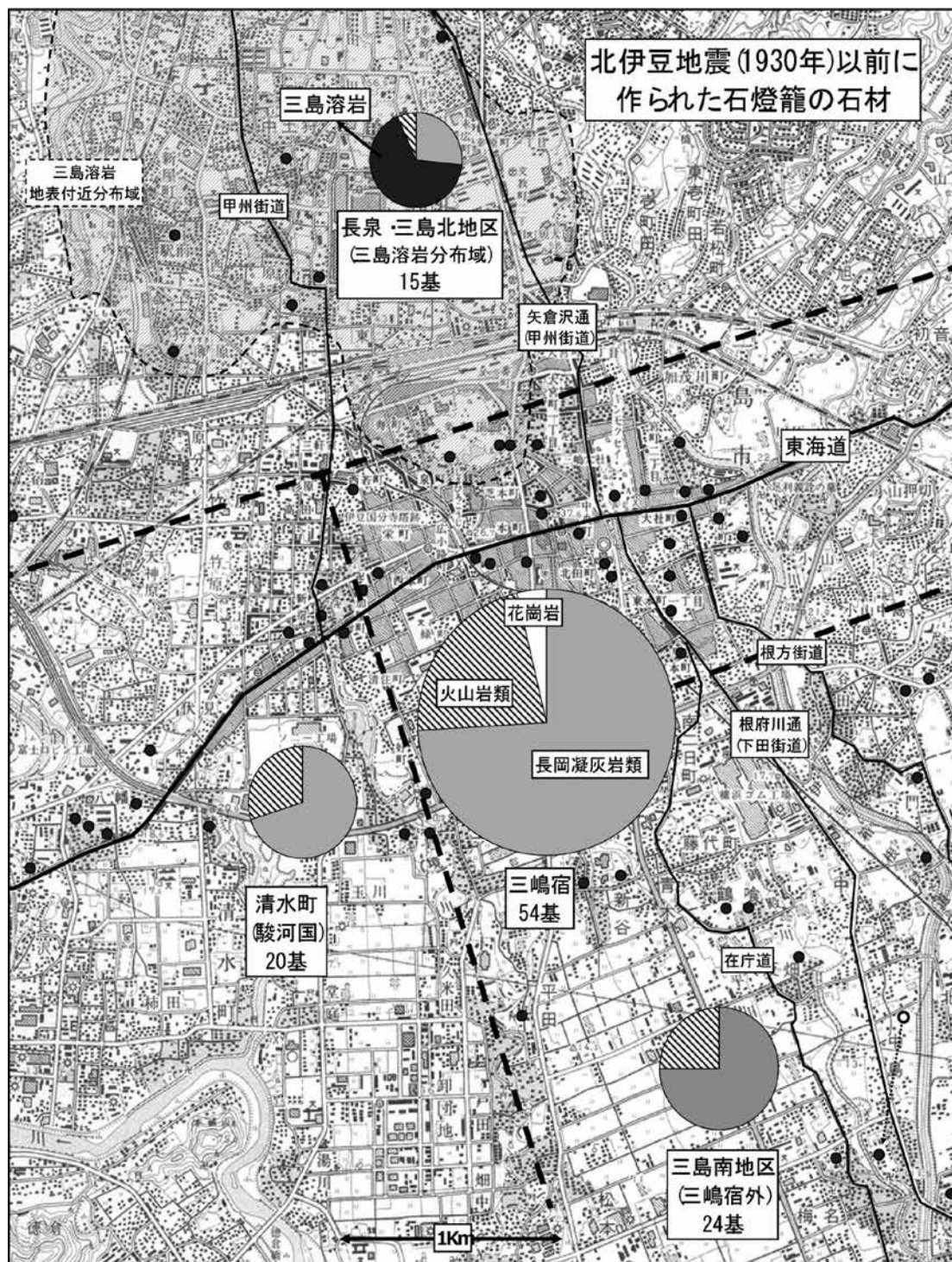


図4 地域による使用石材の違い 1/2.5万 三島図幅

1960年代前後は、火山岩類製と花崗岩製が殆どで、伊豆の石切り場から産出した最後の凝灰岩製燈籠は三島市・新谷稲荷神社に昭和45年(1970)に奉納された小室石製(伊豆の国市の城山の南にあった石切り場から産出)である。

昭和47年(1972)以降は設置数が急増する。高度経済成長によるものと思われるが、比較的安価で見栄えの良い、海外産の花崗岩類製が殆どである。

(2) 地域による利用石材の違い

伊豆各地で凝灰岩の採石が盛んに行われ、海外や国内遠方から石材が搬入される以前(北伊豆地震・1930年以前)に作られた石燈籠を対象にして、調査地域を4地区に分け、地域ごとの石材の違いをグラフ化した(図4)。

「三島宿地区」は江戸時代、宿場内の寺社境内には奉納された石燈籠があり、旧東海道に沿った町内の辻々には常夜灯として石燈籠が設置されていた(対象となる54基中38基は江戸時代のもの)。

調査した54基中40基は、長岡凝灰岩上部層が使用されている。12基は、箱根火山や北江間に分布する第三系の安山岩類などの硬い火山岩が使用されている。

残る2基は、1740年に三島宿の有力者達が三島大社に奉納し、1930年の北伊豆地震で倒壊破損し、三島市・日隅神社に移された花崗岩製のものである(奉納者名は移設後の燈籠では確認できないが、文政7年1824の三島問屋場の古文書に記録が残っている)。

花崗岩製の2基以外は全て近辺の伊豆国内に産地がある。

「三島南地区=三島宿外」、調査した24基の石材は、18基が長岡凝灰岩上部層製、6基が伊豆の火山岩類製で、三島宿地区の構成と同じ傾向を示した。

旧東海道沿いの「清水町(駿河の国)」で調査した20基は、14基が長岡凝灰岩上部層製、6基が火山岩類製で、三島宿地区の構成と近似するが、黄瀬川脇の智方神社の2基は神社に最も近い山地である香貫山の火山岩類を使用している。

「三島宿北方・長泉地区」の三島溶岩(新富士火山の旧期溶岩・約1万年前)露出域では、15基中10基が三島溶岩製で大半を占め、長岡凝灰岩上部層製は4基と少ない。

地域で分けた石燈籠の石材は、三島宿を含む旧東海道沿いと、その南部では長岡凝灰岩上部層製が主流だが、三島宿の北側では三島溶岩製が多い。

三島宿内にも三島溶岩が露出しているが利用されなかった理由は、溶岩よりも加工しやすい凝灰岩が、伊豆国内の近辺で得ることができたからだろう。

なお、熱水作用を強く受けて美しい緑色を呈し、肌理が細かく見栄えの良い、長岡凝灰岩中部層を使用した燈籠も数点確認したが、風化が激しく表面が剥離し、設置時期が特定できず、調査対象にならなかった。風化しやすい石材は風雨にさらされる燈籠の用材としては適していない。

3. 火袋の石材と地震の関係

古い石燈籠を観察すると、火袋だけ石材が異なっている場合が多く、火袋を欠くものもよく見かけた。

三島市・六所王子神社境内の明治39年(1893)に奉納された石燈籠は、火袋に「大正12年9月の

強震（関東大震災）で破損したので修理した」との記載がある。

背が高く、部材を積み重ねた石燈籠は地震で倒れやすい。倒壊すると火袋は高い位置にあり、内部を刳り抜いてあるので、割れてしまう確率が非常に高い。昭和5年（1930）、丹那断層が活動した北伊豆地震では、三島大社の被害写真が複数残されているが、合計4基の石燈籠の倒壊が確認でき、全てで火袋が粉碎している。

古い石燈籠の火袋の有無や、作り変えは、過去の地震被害を現在に伝える貴重な歴史証拠である。

江戸時代中期以降三島地域を襲った大地震は元禄（1703、三島宿の多くの家屋や倉が倒壊）・宝永（1707、倒壊家屋多数）・安政（1854、家屋全壊986戸/1074戸、寺社全壊47軒/51軒）・関東（1924、全壊48戸）・北伊豆（1930、全壊476戸）地震などが知られているので、それぞれの年代で区切り、166基の石燈籠の火袋の有無・作り変えをグラフ化した（図5）。

北伊豆地震発生以前に設置された石燈籠114基のうち、18基には火袋がない。6基は破損・修理の跡がある。

83基（江戸時代61基・内不確実4基、明治期11基、大正期6基、昭和期5基）は竿と火袋の石材が異なっており、大井凝灰角礫岩・小室石・人造石・コンクリート製などの大正時代以降に本地域で使用されるようになった石材が、江戸時代や明治期の石燈籠に組み込まれている場合も多い。

竿と同質で殆ど無傷の火袋を持つものは7基しかない。その石材は安山岩3、デイサイト1、三島溶岩1、と頑丈な石材が使用されている。竿と同質の火袋で長岡凝灰岩上部層製のものは清水町・土肥山稲荷神社境内に大正11年（1922）に設置された2基のうちの1基しかない。神社付近は御殿場泥流上にあり地盤が安定しており、北伊豆地震の震源から離れていることなども幸いし、奇跡的に粉碎を免れたものだろう（一対で奉納された他の石燈籠の火袋は作り直されている）。

残る1基は三島市・鶴喰八幡神社境内にある。丈夫な大井凝灰角礫岩製（明治43年・1910）で、竿の上部が刳り抜かれ火袋となっており、構造が異なる。

北伊豆地震以後に設置された石燈籠52基のうち、凝灰岩製の5基を含み、50基の火袋は竿と同質である。

火袋と竿の石材が異なる2基は三島市・御門天神社境内の昭和40年（1965）奉納の一対だけで、全体が安山岩製で火袋も特徴がやや異なる安山岩からなる。作り直しではないかもしれない。

以上より、三島市・長泉町・清水町地域の北伊豆地震以前に設置された石燈籠の殆ど全ては、地震で倒壊し、火袋は粉碎し、作り直された可能性が非常に高いことがわかる。特に安政地震や北伊豆地

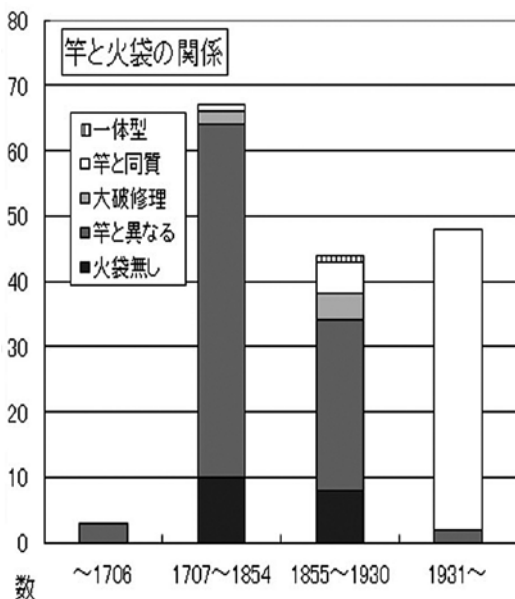


図5 竿と火袋の材質の関係

震で火袋が粉碎したものの中には火袋が新調されず放置されているものも多い。古い石燈籠は過去の地震被害を今に伝える大切な証拠である。

以下に、火袋作り替えのいきさつを推定した具体例を一件あげておく。

調査地域で最古の石燈籠、長泉町・願掛八幡神社境内に設置されている寛永19年（1642）奉納の石燈籠は、火袋は黒色の三島溶岩で作られており、二つに割れたものをつなぎ合わせてある。火袋以外の部分は灰色の三島溶岩で構成されている（図6）。

対になって並ぶ石燈籠は全体が黒色の三島溶岩製で、明治14年（1881）8月に奉納されているが破損・修理の跡がある。これから以下のことが推定される。

寛永19年奉納の石燈籠は、安政地震で火袋が壊れ、そのまま放置されていたが、神社に対して崇敬の念の篤い氏子（若いころ安政地震を経験し、町内の諸神社の石燈籠が壊れたまま放置されているのを心苦しく思っていた）が一念発起し27年後に黒色の三島溶岩製燈籠を1基奉納した。その際、古い石燈籠にも同質の溶岩で火袋を作り直し、一対とした。

しかし、2基の石燈籠は1930年の北伊豆地震で倒れ、共に破損したが、補修し現在に至っている。

願掛八幡神社に黒い三島溶岩製燈籠を奉納した氏子は、もう1基、全く同質・同形・同大の石燈籠を、長泉町内の割狐塚稲荷神社（溶岩塚をそのまま利用している）に、明治14年2月に奉納している。本来は2基の燈籠を願掛八幡神社に奉納する予定だったが、古い石燈籠が壊れながらも残っていたので、それを整備し直し一対とし、一基は割狐塚稲荷神社に奉納したのかもしれない。

なお、上記以外の石燈籠でも、作り直した火袋の石材の違いから、作り直しの時期や石材店の違いを推定できる。今後も調査を継続し後日報告したい。

4. おわりに

普段何気なく見てきた石燈籠も、じっくり観察すると、貴重な情報を我々に伝えてくれる。

使用石材の時代変化や地域による違いは、地域交流圏の変化を示している。設置数の増減は、その時々日本の状況を反映している。火袋の有無や作り直しは、過去の地震被害を暗示している。

ジオツアーの楽しみは、天然記念物クラスの崖だけではなく、身近なものにも地球のダイナミックな営みと、それを活用する人間の関係を確認できることである。私たちを取り巻くすべてが「ジオパーク」の構成要素である。

「ジオツアー三島」の参加者は、延べ1000名を超えた。ジオツアーに賛同し、東部支部サポーター



図6 調査地域最古の石燈籠
長泉町・願掛八幡神社
三島溶岩製だが、火袋は作り直してあり、さらに破損・補修

寺社名等	場 所	火袋	竿・石材	西暦	寺社名等	場 所	火袋	竿・石材	西暦
1 御田八幡神社	長泉町下土坪	異	三島淳岩	1642	84 綱刀石床別命神社	谷田	異	長岡凝灰岩上部層	1872
2 若宮八幡神社	西若町	異	玄武岩?	1659	85 綱刀石床別命神社	新谷	異	長岡凝灰岩上部層	1873
3 八幡神社	清水町八幡	異	硝石山岩?	1698	86 綱刀石床別命神社	長泉町下土坪	大塚	三島淳岩	1881
4 割馬塚稲荷神社	長泉町下土坪	異	安山岩	1709	87 割馬塚稲荷神社	長泉町下土坪	同	三島淳岩	1881
5 三島大社	大宮町	異	凝灰岩	1711	88 割馬塚稲荷神社	長泉町下土坪	異	長岡凝灰岩上部層	1883
6 三島大社	大宮町	異	凝灰岩	1711	89 割馬塚稲荷神社	長泉町下土坪	異	長岡凝灰岩上部層	1883
7 耳石神社	幸原	異	三島淳岩	1727	90 地蔵・観音堂	清水町新宿	異	長岡凝灰岩上部層	1892
8 日隔神社	大社町	異	花崗岩	1740	91 六所王子神社	大宮町	修理	安山岩	1898
9 日隔神社	大社町	異	花崗岩	1740	92 鶴鳴八幡	鶴鳴	異	長岡凝灰岩上部層・ラミナ	1907
10 磐方神社	清水町長沢	異	安山岩質集塊岩	1758	93 日隔神社	大社町	異	長岡凝灰岩上部層	1908
11 磐方神社	清水町長沢	異	安山岩質集塊岩	1758	94 磐方神社	清水町長沢	同	ダイヤイト	1910
12 磐方寺	北田町	異?	長岡凝灰岩上部層	1762	95 鶴鳴八幡	鶴鳴	一体	大井凝灰岩角礫岩(	1910
13 磐方寺	北田町	異?	長岡凝灰岩上部層	1766	96 鶴鳴八幡	鶴鳴	異	大井凝灰岩角礫岩(	1912
14 御田神社	青木	異?	長岡凝灰岩上部層	1768	97 三島大社	大宮町	同	安山岩	1918
15 御田神社	青木	異?	長岡凝灰岩上部層	1768	98 三島大社	大宮町	同	安山岩	1918
16 雲龍神社	三好町	異	長岡凝灰岩上部層	1770	99 地方神社	清水町新宿	修理	安山岩質	1919
17 三島大社	大宮町	異	安山岩	1773	100 地方神社	清水町新宿	同	安山岩質	1919
18 三島大社	大宮町	異	安山岩	1773	101 林光寺	加屋町	異	長岡凝灰岩上部層・ラミナ	1919
19 法華寺	東本町	異	長岡凝灰岩上部層	1773	102 本覚寺	泉町	異	長岡凝灰岩上部層	1920
20 西福寺	大宮町	異	長岡凝灰岩上部層	1773	103 本覚寺	泉町	異	長岡凝灰岩上部層	1920
21 間歇神社	東本町	異	長岡凝灰岩上部層	1776	104 土肥山稲荷神社	清水町	異	長岡凝灰岩上部層	1922
22 六所王子神社	大宮町	同	安山岩質	1776	105 土肥山稲荷神社	清水町	同	長岡凝灰岩上部層	1922
23 守瀬八幡神社	日ノ出町	異	長岡凝灰岩上部層	1777	106 林光寺	加屋町	異	長岡凝灰岩上部層	1923
24 守瀬八幡神社	日ノ出町	異	長岡凝灰岩上部層	1777	107 八幡神社	日の出町	異	長岡凝灰岩上部層	1924
25 地方神社	清水町新宿	異	長岡凝灰岩上部層・ラミナ	1780	108 八幡神社	日の出町	異	長岡凝灰岩上部層	1924
26 神明宮	平田	異	安山岩	1781	109 若宮八幡神社	西若町	異	安山岩	1926
27 雲龍寺	長泉町本宿	異	三島淳岩	1787	110 東光寺	清水町長沢	異	長岡凝灰岩上部層	1927
28 本覚寺	泉町	異	長岡凝灰岩上部層	1792	111 東光寺	清水町長沢	異	長岡凝灰岩上部層	1927
29 本覚寺	泉町	異	長岡凝灰岩上部層	1792	112 地方神社	清水町新宿	異	長岡凝灰岩上部層	1929
30 堀川秋葉神社	加屋町	異	斑岩質玄武岩	1793	113 雲龍神社	三好町	異	長岡凝灰岩上部層?	1929
31 八幡神社	中央町	異	長岡凝灰岩上部層	1793	114 八幡神社	中央町	異	長岡凝灰岩上部層	1930
32 常林寺	本町	異	長岡凝灰岩上部層	1799	115 秀源寺	清水町長沢	同	長岡凝灰岩上部層	1934
33 秀源寺	清水町長沢	異	長岡凝灰岩上部層	1800	116 秀源寺	清水町長沢	同	長岡凝灰岩上部層	1934
34 橋原神社	北田町	異	安山岩	1802	117 八幡神社	清水町八幡	同	黒雲母花崗岩	1942
35 火の見稲荷	清水町八幡	異	長岡凝灰岩上部層	1803	118 八幡神社	清水町八幡	同	黒雲母花崗岩	1942
36 祐泉寺	大宮町	異	凝灰岩	1804	119 三島大社	大宮町	同	花崗岩	1953
37 八反畑稲荷	八反畑	修理	安山岩	1806	120 三島大社	大宮町	同	花崗岩	1953
38 六所王子神社	大宮町	異	長岡凝灰岩上部層	1806	121 山神社	清水町伏見	同	ダイヤイト	1960
39 井之森稲荷神社	谷田	異	安山岩	1806	122 山神社	清水町伏見	同	ダイヤイト	1960
40 御田神社	北田町	異	長岡凝灰岩上部層	1809	123 御田神社	谷田御門	異	安山岩	1965
41 庚申堂	長泉町下土坪	異	三島淳岩	1811	124 御田神社	谷田御門	異	安山岩	1965
42 東し西神社	長泉町下土坪	異	三島淳岩	1812	125 綱刀石床別命神社	新谷	同	小室石	1970
43 間歇神社	東本町	異	長岡凝灰岩上部層	1822	126 祐泉寺	大宮町	同	花崗岩	1972
44 大場神社	大場	異	長岡凝灰岩上部層	1822	127 祐泉寺	大宮町	同	花崗岩	1972
45 耳石神社	幸原	異	三島淳岩	1823	128 法華寺	東本町	同	花崗岩	1972
46 磐方神社	清水町長沢	異	凝灰岩	1832	129 日吉神社(山王宮)	長泉町中土坪	同	花崗岩	1974
47 芝原氏小祠	鶴鳴	修理	長岡凝灰岩上部層	1834	130 日吉神社(山王宮)	長泉町中土坪	同	花崗岩	1974
48 日吉神社(山王宮)	長泉町中土坪	異	三島淳岩	1837	131 本覚寺	泉町	同	花崗岩	1977
49 右内神社	横名	異	安山岩	1837	132 本覚寺	泉町	同	花崗岩	1977
50 浅間神社	芝本町	異	長岡凝灰岩上部層	1838	133 御田神社	青木	同	凝灰岩	1977
51 日吉神社(山王宮)	長泉町中土坪	異	三島淳岩	1838	134 御田神社	青木	同	凝灰岩	1977
52 若宮八幡神社	西若町	異	長岡凝灰岩上部層	1839	135 熱野神社	清水町伏見	同	花崗岩	1979
53 右内神社	横名	異	安山岩	1839	136 熱野神社	清水町伏見	同	花崗岩	1979
54 芝田神社	芝本町	異	長岡凝灰岩上部層	1840	137 雲龍寺	北田町	同	花崗岩	1980
55 三ツ石神社	広小路町	異	玄武岩?	1840	138 左内神社	中村	同	花崗岩	1980
56 三ツ石神社	広小路町	異	玄武岩?	1840	139 左内神社	中村	同	花崗岩	1980
57 浅間神社	芝本町	異	長岡凝灰岩上部層	1840	140 綱刀石床別命神社	谷田	同	凝灰岩・雲母目立つ	1981
58 林光寺	加屋町	異	長岡凝灰岩上部層	1841	141 綱刀石床別命神社	谷田	同	凝灰岩・雲母目立つ	1981
59 秋葉社	本町	異	長岡凝灰岩上部層	1842	142 圓明寺	芝本町	同	花崗岩	1981
60 芝田神社	芝本町	異	長岡凝灰岩上部層	1844	143 圓明寺	芝本町	同	花崗岩	1981
61 日隔神社	大社町	異	長岡凝灰岩上部層	1844	144 木町観音堂	西本町	同	花崗岩	1982
62 守瀬八幡神社	日ノ出町	異	長岡凝灰岩上部層	1845	145 木町観音堂	西本町	同	花崗岩	1982
63 八幡神社	清水町八幡	異	長岡凝灰岩上部層	1845	146 割馬塚稲荷神社	長泉町下土坪	同	花崗岩	1989
64 街道沿い	清水町新宿	異	長岡凝灰岩上部層	1846	147 割馬塚稲荷神社	長泉町下土坪	同	花崗岩	1989
65 間歇神社	東本町	異	長岡凝灰岩上部層	1848	148 八幡神社	清水町八幡	同	花崗岩	1990
66 浅間神社	芝本町	異	長岡凝灰岩上部層	1852	149 八幡神社	清水町八幡	同	花崗岩	1990
67 浅間神社	芝本町	異	長岡凝灰岩上部層	1852	150 八反畑稲荷神社	八反畑	同	花崗岩	1990
68 天白神社	中	異	長岡凝灰岩上部層	1852	151 八反畑稲荷神社	八反畑	同	花崗岩	1990
69 天白神社	中	異	長岡凝灰岩上部層	1852	152 法信寺	清水町八幡	同	花崗岩	1991
70 八幡神社	清水町八幡	異	砂質凝灰岩	1857	153 法信寺	清水町八幡	同	花崗岩	1991
71 雲龍神社	清水町玉川	異	長岡凝灰岩上部層	1857	154 割馬塚稲荷神社	長泉町下土坪	同	雲母目入色花崗岩	1993
72 若宮八幡神社	西若町	異	長岡凝灰岩上部層	1858	155 割馬塚稲荷神社	長泉町下土坪	同	雲母目入色花崗岩	1993
73 山神社	清水町八幡	異	長岡凝灰岩上部層	1859	156 雲龍神社	三好町	同	花崗岩	1994
74 若宮八幡神社	西若町	異	長岡凝灰岩上部層	1860	157 八幡神社	清水町八幡	同	花崗岩	1995
75 芝田神社	芝本町	異	長岡凝灰岩上部層	1862	158 八幡神社	清水町八幡	同	花崗岩	1995
76 大場神社	大場	修理	ダイヤイト	1864	159 林光寺	加屋町	同	花崗岩系	1996
77 雲龍寺	長泉町本宿	異	長岡凝灰岩上部層	1864	160 林光寺	加屋町	同	花崗岩系	1996
78 雲龍寺	長泉町本宿	異	長岡凝灰岩上部層	1864	161 雲龍寺	北田町	同	花崗岩	1998
79 雲龍神社	三好町	異	長岡凝灰岩上部層	1869	162 天神社	大宮町	同	花崗岩	1999
80 御田神社	北田町	異	長岡凝灰岩上部層	1870	163 天神社	大宮町	同	花崗岩	1999
81 御田神社	北田町	異	長岡凝灰岩上部層	1870	164 庚申堂	長泉町下土坪	同	花崗岩	2002
82 雲龍神社	三好町	異	長岡凝灰岩上部層	1870	165 芝原氏小祠	鶴鳴	同	花崗岩	2012
83 綱刀石床別命神社	谷田	異	長岡凝灰岩上部層	1872	166 芝原氏小祠	鶴鳴	同	花崗岩	2012

図7 石燈籠一覧 火袋、異=竿の石材と異なる、無=火袋なし、同=竿の石材と同じ。

会員に加入された方も60名を超えた。未調査の地域も残っている。今後も皆さんと一緒にジオツアーを楽しみながら、調査を続けようと思う。

引用文献

沢村孝之助（1955）：1/7.5万 沼津図幅地質図。地質調査所。

市誌編纂委員会（1958）：三島市誌上巻。三島市，352p.

久野久（1972）：1/5万 箱根火山地質図。再出版委員会，大久保書店。

小川賢之輔（1972）：静岡県駿東郡長泉町に存在する溶岩塚群。静岡地学，23，40-51.

清水町教育委員会（1991）：清水町の石造文化財。清水町，185p.

高橋豊（1996）：伊豆長岡町の自然。伊豆長岡町史上巻，伊豆長岡町教育委員会，33-104.

長泉町文化財調査報告書（2003）：長泉町の石造物。長泉町教育委員会，337p.

宮地直道・富樫茂子・千葉達朗（2004）：富士火山東斜面で2900年前に発生した山体崩壊。火山，49，237-248.

海野進（2007）富士山溶岩流の特性。富士火山，山梨県環境科学研究所，269-283.

神奈川県生命の星・地球博物館（2008）：箱根火山。神奈川県，93p.

伊豆学研究会（2010）：伊豆大辞典。羽衣出版，1224p

静岡県（2011）：伊豆半島ジオパーク構想指針書。静岡県，176p.

増島淳（2012）：ジオツアー三島宿の成果（1）。三島市郷土資料館研究報告5，1-18.

三島市郷土資料館（2014）：三島問屋場・町役場文書目録。三島市，226p.